

## [課題演習概要]

## 小学校体育科授業における運動有能感を高める授業実践研究

町本 雄太

Yuta MACHIMOTO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース  
初等教育高度実践力特別プログラム

(2024年1月10日受理)

キーワード：運動有能感，ワークショップ，生涯スポーツ，質的研究

## 1 研究の目的

本研究は、小学校体育科授業実践においてワークショップ型の学習活動を取り入れることを通して運動有能感を高め、その具体を子どもの姿で明らかにすることを目的とする。

## 2 研究の計画

MS2 前期	運動有能感に関する先行研究調査
MS2 後期	ティーボールでの実践と分析
MS3 前期	運動有能感に関する先行研究調査 跳び箱での実践と分析
MS3 後期	体づくり運動での実践と分析 研究のまとめ

## 3 研究の内容

## (1) 先行研究

岡沢ら(1996)は運動有能感を高めるためには「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3つの要素があることを示した。また、中野(2001)はワークショップの定義について「講義などの一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同して何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」と述べている。先行研究によって、

子どもの運動有能感を高めるためには、ワークショップ形態を取り入れた授業を構想し、子ども自らが運動を創り上げる学習活動が効果的である事が示唆された。

しかしながら、その効果については、子どもの振り返りの記述や記録中心の考察ばかりで、授業中の言動を精緻に記録し、個々の子どもの運動有能感の育ちを検討した研究はほとんどない。学級の子ども全員に共通する運動有能感などありはしない。故に、その子なりの運動有能感を捉えていく必要がある。そのため体育科授業での子どもの言動を精緻に記録し、その子なりの運動有能感を質的に捉えていくことが必要になる。そこで本研究では、ワークショップ型を用いることで、子どもの動きや主体性をより細かく観察することが可能になり、個々の運動有能感を向上させる為の手立てとなり得るのではないかと考えた。子ども自らが活動する場を構想し実際に体を動かすことで、より運動有能感向上に繋がるのではないかと推察する。

## (2) 授業実践

単元名	体づくり運動
主眼	活動を通してそれぞれの場の要素を高めたり、場づくりのポイントをもとに意見交換をして自分たちの場がよりよくなるための改善点を見つけ次時に生かすことができる

## (3) 授業分析・考察

80Y 楽しかった？  
 81U うん楽しかった。タイヤのやつが一番良かった  
 82T3 何が良かったって？ 83U タイヤ！  
 84T3 タイヤの何が良かったん？  
 85U あたたまる 86T3 どこが？  
 87U お尻が  
 ※T3は、体育の専任教諭である

80Yの「楽しかった？」の問いかけに対して、81Uが具体的に答えている。これらから児童Uが児童Yの班の場を肯定していることが見て取れ、主に受容感の視点から運動有能感を高める働きかけができていないと推察できる。また、84T3の問いかけに対して、85Uの「あたたまる」と表現していることや、87Uの「お尻」と具体的に体の位置まで感じ取ることができている。この「あたたまる」という表現はしっかりと運動ができているということ子どもなりに理解できていることであると推察ができる。また体の部位まで刺激されていることが理解できていることから、児童Uの身体的有能さの認知や受容感が高まっており、運動有能感が向上していると考えられる。

131M (片足立ちを表現しながら) これ結構いい。これ体幹で結構いい。これねHすぐ終わるけど他3人なかなか終わらんよ  
 132T じゃあすぐ終わっちゃう人と一、ね、その辺どうしたらいいんかね？継続で何秒するとか？  
 133M え、ハンデ。えーつとね、1回なら落てもいいとか  
 134T そうやね。(略)

131Mの「これ体幹で結構いい」という発言により、児童Mが活動した場について、運動の効果を受けていることが伺える。また、同じ班に運動が苦手な子がいることを理解した上で、132Tの発問に対して、133Mでその子にとって、運動の有効性を生むための工夫を考えていることが見て取れる。さらに、苦手意識のある児童Hも、十分に楽しみながら運動ができるような場づくりを行っていることがわかる。本場面は、児童Mが児童Hに対してその子なりの運動有能感を高める働きかけを行っている姿が賢慮に現れている場面であると考えられる。

218M えー平均台？で体を伸ばすやつが、Bグループから結構伸びて良いいって言われたからそこを続けたいのとあと、個数が少なすぎて3往復したって言うから、増やせたらいいな、ストレッチを増やせたらいいなって思いました(略)  
 220T この班回って、お、これ柔らかくなりそうやなって感じた人？  
 221 複 (挙手)

これは、授業の最後に全員で振り返りを述べる場面である。児童Mらは「体の柔らかさを高める運動」のグループであり、218Mで自分たちの班の場が他の班の仲間たちにも運動効果を成していることと捉えていることが分かる。また、改善点を指摘されたことを素直に受け止めさらに良くなるように子どもなりに分析ができている。これらから児童Mの班の場が周りから認められていることで運動有能感を高める働きかけができている。また、220Tの問いかけに対して、一定数が体が柔らかくなりそうだと感じている。これらから児童Mらが統制感の視点からも運動有能感を高める働きかけができていないと解釈をした。

## 4 成果と課題(成果○, 課題●)

○児童自身が運動に必要な要素を理解し、場を構成した。このことにより、楽しさと共に仲間と一緒にやってみようという働きかけが促進され、運動有能感を高めることができた。

○実践上の成果としてワークショップ型で学習を展開することで、場の工夫が柔軟に行うことができた。そのことにより、運動に苦手意識がある子も運動有能感も高められていることが明らかになった。

●ただ、児童が創作した場が「運動」として成り立っているのか断言はできない。そのため児童が効果を感じる発言をしても本当に学習効果があるか定かではないため、児童の学びをいかに見取るかを詳細に検討していく必要がある。

## 主な引用・参考文献

- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究  
 中野民夫(2001) ワークショップ-新しい学びと創造の場